現地人の反乱（パンデラ事件）

加藤　實
本町三丁目

私はスマトラ島北部防衛の任に就いた近衛第二師団（司令部メダン市）所属近衛歩兵第三連隊（略称近歩三）、連隊本部に勤務して居りました。当時の私は幹部候補生の下士官で、スマトラ進駐時、オランダ軍から鹵獲したブレンガン・キャリヤーの指揮官でした。ブレンガン・キャリヤーは無蓋、キャタペラで走り、エンジンはフォードV8、ブレンガン（機関銃）を搭載する軽装甲車です。略してキャリヤーと称しておりました。

昭和二〇年五月三日、午前三時頃、兵舎で熟睡していた私は駆け込んで来た榎本中尉に叩き起こされた。「連隊本部より緊急電話がありサマランガ付近で現地人が反乱した。ブレンガンを搭載すると何車両出動出来るか」とのことである。当時のキャリヤー部隊の兵員は私以下十名、キャリヤーは九車両であった。操縦だけなら全車両出動出来るが、射手も含めると五車両で十名を要する。私は榎本中尉に「兵三名を予備に残し、三車両でどうですか」と答えた。「よし。三車両を指揮して直ぐ連隊本部に行け。実弾を忘れるな」。私は三車両を指揮し、暗夜にキャタペラの音を響かせながらビルンに向かった。

ビルンの兵舎は暗く静かだったが、連隊本部の白い建物だけは煌々とした灯に浮かび上がっていた。階段を登って中に入ると、机を真ん中にして藤岡連隊長と甲副官加藤大尉が向い合い、立ったまま協議している。五、六歩離れて立っている乙副官伊藤中尉に「キャリヤー三車両到着しました」と小声で報告すると脇に並んだ。部屋には四人しかいない。緊迫感が漂う。間もなく連隊本部の准尉が第四中隊の下士官を伴って入って来た。

協議を終えた加藤大尉は私と第四中隊の下士官を呼び寄せ「これからパンデラの兵舎に行って貰うが、どちらが先任か」と聞かれた。

私は幹部候補生なので、当然彼の方が先任である。その旨伝えようとしたが、彼に先を越されてしまった。「下士官になったのは私が後で指揮は出来ません」「それなら君だ」。加藤大尉は私に「パンデラで現地人の襲撃を受け、第七中隊の兵三名が重

傷を負った。暴徒は数十名で、付近に潜んでいるとの情報である。君はキャリヤーと四中隊の一箇分隊を指揮して現地に急行、警備にあたれ」「復誦します」「復誦はよい、少し待て」と言うと加藤大尉は連隊長に一礼した後、「これでいいですか」と許可を求めた。連隊長は一言も言わず頷いた。この瞬間連隊長命令となって、私は独立した小部隊の指揮官となった。

四中隊の一箇分隊は各小隊から衛兵要員としてビルンに来ていた兵で約十名である。私は四中隊出身で彼等とは顔馴染みであったので指揮はとり易い。三車両に分乗させると衛兵司令所の兵に見送られ、時速三〇キロ、パンデラを目指した。パナデラ兵舎はサマランガ防衛地区にあってビルン西方三〇キロの主要道路に面した北側にあった。現地人の反乱とはいえ実戦である。指揮の拙劣さから一兵たりとも死傷させてはならない。隙を見せず細心の注意で指揮に当たった。臆病な私は勇猛果敢とは正反対であった。

十キロを走りブダタ橋に差しかかると私は停止を命じ四中隊の兵全員を下車させた。昨年八月英軍コマンド部隊に爆破された橋で、その時現地人が案内役を務めていたとの噂もあった。彼等は裸足で武器はパラン(山刀)。音もなく襲ってくる。木造の橋を落とされ襲撃される不安がよぎった。橋の両端を四中隊の兵に警備させると一車両ずつ橋を渡らせた。渡り終わると一目散に遁走、暫くの間時速七〇キロで突っ走った。夜が明けパンデラ兵舎に近づくと見通しの良い場所を選び休憩を命じた。二、三の現地人が何事もなかった様に挨拶して通り過ぎていく。これなら大丈夫と三車両を指揮して一気に衛門を通過、衛兵司令所の前で停止した。

七中隊の小隊長(少尉)が待っていて、「御苦労、キャリヤーの配備は何処にするか」と聞かれる。「衛兵司令所前の広場にします」と答えた。軽装甲車三両は現地人の威嚇になる。頼もしげににこにこしながら、「よし、宿舎はあそこがいい。ゆっくり休め」と小隊長。私は「非常の場合直ぐ出動します。衛兵に怒鳴らせて下さい」と言ってその場を離れた。

兵舎は床が高く道路を隔てて直角に数棟並んでいて、キャリヤー部隊は真ん前に衛兵所を見おろす部屋を割り当てられた。部屋で寛いでいると、小尉の怒鳴り声が聞こえてきた。窓から見ると、衛兵司令の下士官が叱責されている。「お前は部下を死傷させ、指揮もとらずに逃げたのか。それでも衛兵司令か」。下士官は他の事でも罵倒を浴びせられていたが無言であった。顔は青ざめ放心状態になっていた。「もう直き交替要員が来るから、それまで此処にじっとして居れ。しょうがない奴だ」。部下を見殺しにしては弁明の余地はない。指揮官の悲哀であった。兵が実弾を支給されるのは甲戦備(戦闘態勢)発令時だけで、普段は実弾を持っていない。不意に襲われたら逃げるのが当り前であった。災難としか言い様がない。

私は一休みすると警備の必要上、兵一名を連れて兵営の周囲を回り、兵舎の棟に一つ一つ入った。新部隊移駐の為に作られたのか、木の香りがする新しい建物で、全部空室であった。宿舎の隣の棟に入ると、廊下全体に点々とした血痕があって、中央に大量の血が滲んでいた。兵が逃げ惑い挟み打ちにされた後が歴然としていた。パランは長さ六、七〇センチの細長い三角形の刃物で、先が重く鋭い。現地人は日本人の鉈同様に扱うので、切ると言うよりも割ると言った感じである。全身血にまみれて倒れたのであろうと戦慄を覚えた。

最後に衛兵所に行き見舞を述べたが、司令は茫然として指揮能力を失っていた。しっかりしている一等兵をつかまえて当時の状況を聞くと、彼は奥の仮眠室に案内した。蚊帳の釣り手は切られていたが、一つだけ残っていて投網の様になっていた。

此処で仮眠していると、突然蚊帳の釣り手を切られ襲われたので、「ワァッ」と悲鳴をあげ散り散りになって逃げてしまった。兵営の北側に立っていた歩哨が気付き、ラジャ岬（約七キロ先）の七中隊第一小隊に、椰子林に逃げたもう一名の兵は三・五キロ地点にある四中隊第一小隊に救援を求めた。兵達が恐る恐る戻って来た時には、暴徒は逃げた後だったと言う。

六名中一名は戦死、一名は重傷、廊下に血痕を残した兵は戦死した。

暴徒が襲撃してくる様子もなく、我々はのんびり過ごしていたが、既に連隊長は四中隊と七中隊に出動命令を下していた。第四中隊長中村中尉は主力を率い、ビルンよりトラックで昼頃、続いて第七中隊長池島中尉は一箇小隊を率いてタンブより徒歩で夕刻パンデラ兵舎に到着した。我々と行動を共にした四中隊の一箇分隊は、四中隊長の指揮下に入ったが、キャリヤー部隊は独立して変わらず、私が指揮官であった。

七中隊の宿舎は我々と同じ棟で、私達と隣の部屋は将校用で個室になっていた。廊下に出て隣の部屋をふと見ると、薄暗くなった部屋で池島中尉が体を震わせて泣いていた。前には白布に包まれた遺骨の箱が置かれてあった。そっと部屋に戻ったが、その後もすすり泣く声が続いて聞こえてきた。中隊長では兵に泣き顔は見せられない。孤独の悲しみであった。戦死の部下を悼む池島中尉をかいまみて私の心はたかぶり、なかなか眠りにつけなかった。

池島中尉は幹候出身で戦後「文芸春秋」を隆盛に導いた池島編集長の兄である。

暴徒はパンデラ兵舎より南西約十キロの山中にあるムナサシンパン集落の住民で三〇数名と判明。憲兵、現地人の義勇軍、警官隊が集落に残っていた老人、婦女子を一箇所に収容して警戒に当った。

翌四日、藤岡連隊長がパンデラ兵舎に到着、戦闘指揮所が設けられた。

第四中隊長中村中尉は暴徒の捜査、討伐を命ぜられ、兵約六〇名を率いてムナサシンパンを経て更に南の山岳地帯に分け入ったが、捜索は難行し、夕暮れになると道に迷い、逆に暴徒に襲撃される恐れが出て来た。中村中尉は小隊長を集め対策を協議すると撤退を決意したが、帰る道が判らなかった。困っていると、指揮班長高橋准尉が「私にお任せ下さい」と先頭に立った。高橋准尉は歴戦の勇士で、体格がよく閻魔大王に似て、兵からこわがられていた。しかしこの時は准尉について行けば助かると、闇の中、兵は先を争って准尉にぴったりとつき山を下った。中村中尉は「大丈夫か」と不安であったが、覚えのある道に辿り着くと「此処からは私にも判る」とほっとして指揮をとった。

藤岡連隊長は、四中隊の一箇小隊をムナサシンパンに残し引き続き捜索させる方針だったが、疲労困憊の四中隊をパンデラ兵舎に引きあげさせ、新たに第一中隊第一小隊をムナサシンパンに派遣した。

翌五日昼頃、衛兵司令所の隣にある戦闘指揮所が慌ただしくなった。私は部下にキャリヤーのエンジン点検を命じて立っていると、見知らぬ小尉がやって来て「ムナサシンパンが襲撃された。キャリヤー部隊の出動はどうか」と聞かれた。私はムナサシンパンが湿地帯と聞いていたので「キャタペラで湿地帯を走れば沈んでしまいます。私が一車両で偵察に行きます。出動はそれからにして下さい」と答えた。小尉は戦闘指揮所に入ったが出動命令は出ず、第七中隊がトラックで救援に赴いた。

一中隊第一小隊の指揮官は幹候出身の山内少尉であった。雨中に暴徒の捜索に出かけたが、捕捉することが出来ず、ずぶ濡れになって兵舎に戻ると兵器の手入れを命じ、昼頃歩哨線の巡視に出かけた。

一部の兵は昼食の準備にとりかかっていたが、突然異様な声と共に草むらからパランを持った暴徒が襲いかかった。兵は兵器の手入れ中である。不意をつかれて銃撃は出来ず、白兵戦となった。山内少尉、歩哨はこの時既に斬殺されていたのである。山内小隊は殆どが負傷し、重傷も少なくなく壊滅状態となった。戦死者は少隊長以下五名である。

駆けつけた救援隊が、軽機関銃、小銃の銃弾を浴びせ、暴徒を全滅させ事件は終わった。インドネシア人の犠牲者三二名。悲惨な結末となった。

直接の動機は他部隊の者がムナサシンパンの女性と交渉を持ち、これを知った現地人がイスラム教義に反すると怒り、警備の手薄なパンデラ兵舎を襲った。

遠因としては次のことがあった。

一、連合軍の諜報機関等が日本の敗戦を宣伝していた。

二、日本軍は原住民に対して労務提供を強い、飛行場の工事に、重労働、低賃金で使用したので不満が高まっていた。

私達が現地人と接する時には、サマサマ（同じ）と言い、親しみを持って接していた。近歩三以外の部隊の起こした原因で戦友を失ったのは、言い様のない悲しみである。

翌日午前十時頃、晴れた日で営内を歩いていると東部第六部隊より同じ分隊で一緒に来た深沢にあった。彼とは第一中隊所属となってカバンジャへで別れた以後会っていなかった。上等兵の彼は懐かしそうに私に敬礼した後、「江郷が死んだ」と言った。「御前もムナサシンパンに居たのか」「いや、将校の御供で昨夜着いた。江郷は二階級特進で兵長になった」「二階級特進でも靖国神社ではなあ。可哀そうに。俺もだが、気を付けてつまらぬ事で死ぬなよ」「うん、じゃあ用があるから、これで」。彼と別れた後、私は戦闘指揮所に行き、江郷が歩哨勤務中真先に斬殺された事を知った。

私は品川駅頭で何時までも教官との別れを惜しんでいた江郷の姿を思い浮かべた。

二、三日して出動部隊は引き上げたが、キャリヤー部隊は引き続き警備を命ぜられ、ビルンに帰ったのは二週間後であった。